

管内一酪農場における牛伝染性リンパ腫対策の取り組み

○臼井 茉理子

1. はじめに

乳用牛約 30 頭を飼養する管内一酪農場において令和元年から牛伝染性リンパ腫(以下、EBL) 清浄化対策を農場主の希望により開始した。牛伝染性リンパ腫ウイルス(以下、BLV) 抗体陰性牛からの後継牛確保、初乳製剤の利用、吸血昆虫対策、並び替えおよび牛群検定成績等を考慮した BLV 抗体陽性牛(以下、抗体陽性牛)の計画的な更新を実施してきた。BLV 抗体陽性率は平成 30 年 36%から令和 2 年 16%に低下したものの令和 4 年は 18%となり清浄化達成が進まない現状があったのでこれまでの経過をまとめた。

2. 材料と方法

令和 2 年から令和 4 年までの飼養牛の BLV 抗体検査結果、抗体陽性牛のプロウイルス量、導入や更新などの飼養状況、採血時点の牛の配置情報をまとめた。

3. 結果

令和 2 年、搾乳牛減少のため牛を県外から導入したところ、3 頭中 2 頭が抗体陽性牛だった。感染リスク評価で中リスク以上(100copies/10ngDNA 以上)の牛は令和 2 年 1 頭のみだったが、令和 4 年は 3 頭に増加した。抗体陽性牛の配置情報を整理したところ、令和 3 年、令和 4 年に中リスク以上の抗体陽性牛が隣接した搾乳牛、抗体陽性牛が分娩時に隣接した乾乳牛を陽転させたと推測される事例を確認した。

4. まとめ

EBL 対策は経営状態、牛舎環境、労働力等により実施可能な対策が限定される。本農場では令和 2 年の導入時に BLV 抗体陰性牛導入を強く勧めたが、BLV 抗体陰性牛の購入意志を農場主が家畜商に伝えていなかった。導入後に実施した検査結果で抗体陽性が判明した後、並び替え指導を徹底できていなかった点が反省点である。また、感染リスク評価の中リスクの牛は分娩予定が近く売却や廃用ができなかったことで、結果として本牛に隣接した牛に感染を拡げてしまった。次年度以降、これらの結果を農場主に伝えるとともに、抗体陽性牛の淘汰を推奨することを想定して、BLV 抗体陰性の後継牛を確保するため、交配計画・預託頭数の確認も含め EBL 対策の充実を図り指導を継続していく。